

心のふるさと
史跡小豆坂古戦場保存伝承会
10年の回顧とあゆみ



史跡小豆坂古戦場保存伝承会



史跡小豆坂古戦場保存伝承会の 10 周年を偲び

倉 田 長

皆様ご存じのように小豆坂古戦場は、この小豆坂一帯において今川義元と織田信秀の合戦が天文11年（1542）と天文17年（1548）と二度ほどありましたが小豆坂は越すことができませんでした。

その後永禄6年（1563）一向一揆が起こり徳川家康が一向一揆平定のために戦いました。大きな戦いが三度ほどあり大勢の方々が亡なっています。これらの戦跡が槍立松、血洗い池、甲谷など八ヶ所ほどありましたが、土地開発で戦跡もだんだん無くなり愛知県により大正六年（1917）に日清紡、西の山の中腹に「〔小豆坂古戦場〕愛知県」の碑が建立されました。

現在は三度目の移転で光ヶ丘女子高校の南側にあります。この他、小豆坂古戦場に関心のある先人の方々による、道祖神や句碑、祠、などが戦没者の慰霊と合戦を偲ばせてくれます。

このような、小豆坂合戦の歴史的な意義について平成8年11月（1996）岡崎市文化財保護審議会会長 新行紀一先生に小豆坂合戦の講演をいただき小豆坂合戦の原因、内容、結果、地形と勝敗による歴史の変遷など、小豆坂合戦の意義を聞かせていただきました。その後、平成11年10月7日（1999）岡崎市文化財保護審議会のご審議により小豆坂古戦場一帯が岡崎市史跡指定に認定されました。この小豆坂古戦場一帯が岡崎市の史跡指定に認定されたよき機会に、先輩諸氏の意義ある郷土の歴史を次世代に伝承する意志を受け、当時の櫛田総代会長さん始め社会教育委員長さんや総代の方々が発起人となり下記の総会を開催し、平成13年12月11日（2001）史跡小豆坂古戦場保存伝承会の総会を開催し、満場一致の賛同で発足しました。会員数は役員も含め 43 名でした。この会の目的は、「小豆坂古戦場に関する地域の歴史を考証し、地域内の各歴史文化資料を整備し、かつ保存管理に努め郷土の歴史と共に次世代に伝承することと決めました。」

今までの創設の経緯で申しましたように、学区全体で学校の協力を得ながら年間行事を作り、それに沿って運営をしてまいりました。ここに10周年誌が発刊できますのも、先輩諸氏や会員の皆様方の絶大なるご支援とご協力があったおかげと厚く感謝申し上げます。

具体的にはこの10周年誌に列記しましたので、ご覧頂ければありがたく存じます。小豆坂合戦は戦国時代で其の後幾多の変遷を経ました。現在は宇宙に行けるような時代になっていますが、世界の中には日本の戦国時代のような国もあります。史跡を保存伝承し豊かな未来の郷土を期待し史跡小豆坂古戦場の発展と皆様方のご健勝を祈念します。

最後になりましたが、この会創設当時より、ご指導ご尽力いただいた深谷鑛一様、鈴木美津男様のご冥福を祈り御礼を申します。

合 掌



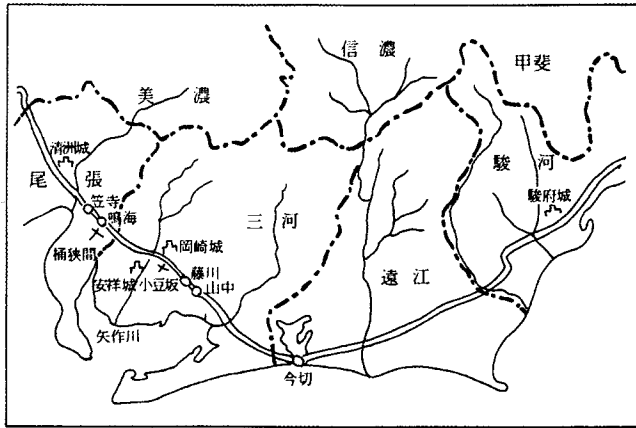
小豆坂古戦場の由来

徳川家康登場以前の西三河の地は、東の今川、西の織田両氏にはさまれ、たびたび戦火にみまわれるところとなりました。

三河を統一した松平清康（家康の祖父）は、天文4年（1535）尾張守山で家臣に殺されました。弱体化した松平氏に対して尾張の織田信秀（信長の父）は、安城を起点に矢作川東岸部への進出を図りました。これを望まない今川義元は、天文11年（1542）軍勢四万を岡崎東部生田ヶ原に進め、出撃してきた織田勢四千と小豆坂で戦いました。

このとき、織田方の七名が槍をふるって奮戦し、彼らが槍を立てて休息した松が槍立松と伝えられています。これ以降、今川氏との関係をさらに深くした松平広忠（家康の父）に対して、天文17年（1548）織田信秀は岡崎攻撃の準備を整え、一方、今川義元は広忠救援のため軍勢を送り、両軍は再び小豆坂で合戦におよびました。この戦いは今川・松平連合軍の優勢の内に展開しました。

今川と織田の両者の争いは、永禄3年(1560)の桶狭間の戦いまで続きました。桶狭間の戦い以降、独立を果たした家康の最初の難関は、一向一揆との対立でした。永禄7年(1564)土呂・針崎の一揆勢と家康が小豆坂。馬頭原で衝突し、家康側が勝利しました。



大正6年愛知県が建立した
「小豆坂古戦場」の碑

小豆坂の戦い

時は戦国時代、家康が誕生した天文11年(1542)と天文17年(1548年)に尾張の織田信秀(信長の父)と駿府の今川義元が二度に渡り激戦を繰り広げたが、二回とも勝負は決しなかった為、松平家(後の徳川)は辛くも生き残ることが出来ました。また元康(後の家康)が21才の時三河一向一揆の戦場にもなり三度の大きな合戦があった所です。約170年後の現在、それを物語る痕跡は僅かのみです。

天文11年の戦い(1542)

天文11年8月、今川治部大輔義元は四万の兵をひきいて西三河を平定しようと攻めて来ました。これに対して織田弾正信秀(信長の父)はわずか四千の兵を率いて上和田に陣を構えました。そして小豆坂で両軍が激しく戦いましたが、織田軍が始めから終わりまで優勢で、さしもの今川氏も尾張進出どころか、三河を手中にすることも出来ず引き返してしまいました。

天文17年の戦い(1548)

天文16年(1547)、織田信秀と上和田城主松平忠倫らが手を結び、岡崎城を併呑しようと志していることを知った岡崎城主松平広忠は、同年10月松平忠倫を寛平三郎に命じて暗殺し、ついでその弟重弘を同年11月山中城(本宿)に亡ぼしました。この知らせを聞き織田信秀は安祥に進出し岡崎城を攻めようとしたので、今川義元勢は岡崎城を救うために出陣し、ここ小豆坂で激しい戦いを繰り広げました。時に1548年3月19日のことでした。今川義元は駿府臨濟寺大原雪斎和尚を大手の大將とし、朝比奈備中守泰能を副將として進み、搦手には朝比奈小三郎泰秀・岡部五郎兵衛長教を軍將として小豆坂へと進軍いたしました。このことは、事前に岡崎城へも連絡されており、岡崎軍は遠州今切本坂まで出迎え、ここで二手にわかれ、岡部五郎兵衛長教が先陣を承り、山中・藤川あたりに陣をとり、8日には小豆坂近くに陣取り10日には上和田城を攻めたてようと計略し、夜明けを待って藤川を出陣いたしました。

一方織田勢は織田三郎五郎信広、津田孫三郎信光等およそ四千騎で尾張清州より笠寺・鳴海を経て、8日には安祥に着き上和田の砦に移り10日には馬頭原に進軍いたしました。総大將織田信秀も安祥に着き、弟の織田三郎信光を軍將として小豆坂を攻めたてようとしていました。ところが山道がけわしく、行く手を見分けかねている時突然今川勢と出逢い織田勢は小勢であったこともあって苦戦を重ね、旗本は盗人木まで退くことを余儀なくされました。これを遺憾に思い、織田孫三郎信光・織田造酒充信広・岡田助右衛門直教・佐々木隼人佐藤通・その弟孫助勝重・中野又兵衛忠利・下方孫三郎国範の七人は一度に颯と引き返し、追手の今川勢に槍を合わせ散々に突きたてて武威を轟かせました。世にこれを小豆坂の七本槍としてその名を今に伝えています。

これによって今にも今川勢は敗戦の危機に面しましたが、時を移さず岡崎軍の中より松平

太郎左エ門信吉・弟松平伝十郎信勝・林藤五郎忠満・小林源之助重次・酒井正親など、威猛けだかに横合いより攻め入って、三河武士の肝玉を見せるのはこの時とばかり戦いました。今川勢の軍將岡部五郎兵衛長教は、この様子を見て織田勢のひるむを幸いに、息をつがせず攻めたてました。織田勢随一といわれた武藤三位入道は、今川勢の小倉与助正孝を一時組伏せましたが、三位入道は与助正孝のために首をはねられてしまいました。このようにして両軍入り乱れ、共に一進一退、戦死するものも多く、傷つく兵も数知れず、激しい戦になりましたが、織田勢は小勢を心得て、長期になれば不利を悟り上和田の城に引き上げました。そして津田孫三郎信光に上和田を守らせ、安祥の城には織田与五郎信康を残し、総大将織田信秀は尾張をさして引き上げました。

今川勢もかなりの痛手を受けたので深追いすることなく、大将雪斎和尚と副將朝比奈備中守泰能をしばらくこの地に滞留させ、凱歌をあげて駿府さして引き上げました。この戦を中心にして岡崎勢（松平勢）の名は遠近に輝いて三河武士のほまれも高く、これまで織田氏に心を寄せた人々も、数多く帰順したと伝えられています。以後今川、織田の対立は桶狭間の戦いまで発展し、松平氏は今川氏に属し、或る意味では、長い苦しい年月を過すこととなったわけです。

身を捨て誉れも高き三河武士の小豆坂にも花と散りけり 読人知らず

小豆坂上和田軍記

永禄6年（1563）9月、一向一揆が各所に起こり、岡崎城譜代の旧臣も日頃老臣に怨みを含む者は一向専念の教化に帰依のともがらなど、忽ち針崎、土呂、佐々木、野寺の一揆軍に思い思いに馳せ集まりました。（岡崎城の蜂屋半之丞・久世平四郎・浪切孫七郎・笈助太夫・近藤新次郎・黒柳孫左エ門・黒柳金七郎・黒柳金十郎・浅井善三郎・浅井小吉・浅井五郎作・渡辺玄蕃允・渡辺八右エ門・渡辺八郎三郎・渡辺半十郎・渡辺八郎五郎・渡辺源蔵・渡辺半蔵・渡辺墨右エ門・渡辺平三郎・渡辺源五左エ門・渡辺半三郎・渡辺太郎右エ門・渡辺平六・浅岡新十郎・浅岡新八・本多喜蔵・安藤治右エ門・加藤喜蔵・加藤治右エ門・加藤源次郎・加藤伝十郎・加藤源蔵・加藤又三郎・加藤源七・佐野小太夫・成瀬新兵衛・大塚七蔵・坂部又六・坂部庄之助・坂部因嶽之助・坂部愛之助・坂部造酒介・坂部又右エ門・平岩善十郎・土屋長吉・川澄文助等百三十一名が一揆軍に加わり総勢一万余名と伝えられています。）

11月25日針崎一揆軍が上和田に押し寄せることが知らされると、大久保党は将卒わずか百七十余人数ばかりで小豆坂に陣をとり、一戦を交えようと待ち構えました。これに対し一揆軍は少数である敵を幸いと思い、一気に取りつぶそうとたくらみましたが、大久保党は誠に時を得たとばかり小豆坂を下り、これを迎えまして散々に切りかかりました。一揆軍は忽ちにして三十余人が討死したと伝えられています。また、上和田では合図の螺貝を吹いて岡崎城に知らせましたので、援軍が次々に一揆軍に襲いかかりまして、さしものに攻防のはげしかった戦いも一揆軍の敗北により終止符を打つこととなりました。

しかし一揆軍との小ぜり合いは、時を隔ててしばしば起こったといわれています。

一の一 史蹟 小豆坂の碑

このあたり一帯は小豆坂古戦場として知られています。天文 11 年と、17 年には今川義元勢と織田信秀勢とがこの地で戦い、有名な小豆坂七本槍も生まれました。岡崎勢もこの戦いで三河武士の名を大いに挙げました。また永禄年間には一向一揆が起こり、ここ小豆坂で激しい攻防が繰り広げられました。大正六年愛知県はこの地に小豆坂古戦場の碑を建てました。甲谷、血草野、血洗池・馬洗池・槍立松・鎧掛松・など、今は見るかげもありませんが、わずかに往時をしのばせています。

風やここらあたりが小豆坂 一雨

遺 跡

◆血洗池：戦いの傷を洗って池水が血に染まったと伝えられる。

現在地は戸崎町字牛転一番 公衆道路と記されている。(天狗堂釣具店～光ヶ丘クリニック周辺にあったものと思われる。)

◆馬洗池：戦いにつかれた馬を洗った池といわれる。

現在は羽根町小豆坂 53 番地、現在、池はなく埋立に際して石碑が建立されている(昭和 55 年)(ディサービスおげんき荘の南側に石碑がある)

◆槍洗池：天文 11 年の戦いで今川軍が槍を洗った池といわれている。

場所は不明である。

◆槍立松：織田七勇士が槍を立てて休息したところ。

記念碑敷地内に石碑(建立者と年が不明)と四代目の松が植えられている。昭和 60 年代までは記念碑東側に建つ松光館の庭先付近にあったものと思われる。

◆鎧掛松：戦い終わって鎧をひもときこの松にかけたと伝わる。

宮松あるいは扇松とも呼ばれ、美合町字宮西にあったが昭和 30 年代に枯れてしまった。跡地には宮跡と書かれた石碑が建つ(昭和 53 年 4 月建立)。

◆甲谷：両軍が相対した天文 17 年の戦いでここに多く討死した。

場所は不明である。

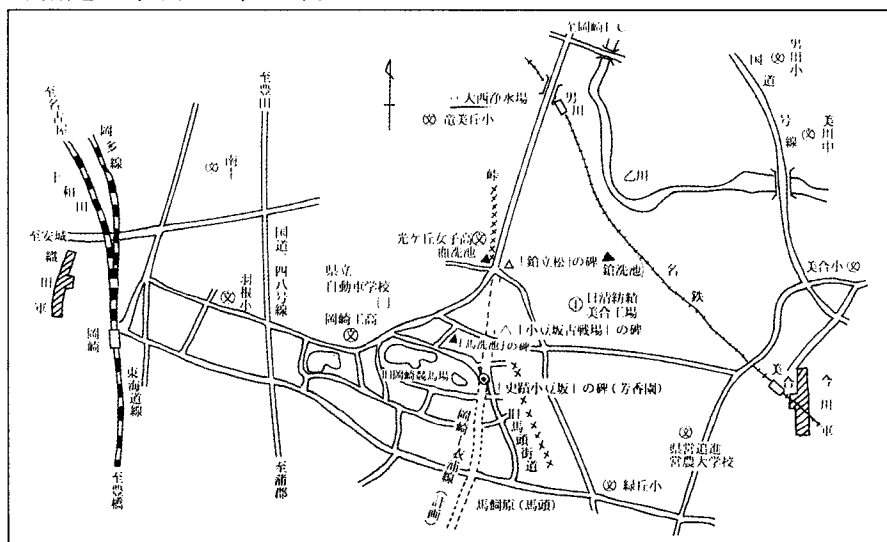
◆足輕塚：天文 17 年の戦いの死者を埋めたところ。

場所は不明である。

岡崎工業高校正門右側の石碑（奥山区画整理記念碑）に次のように書かれている。
此地往時干草野ト稱シ東端小豆坂ノ古戦場ヲ擁シ……（昭和 16 年建立）
従ってこの付近一帯の広大な丘陵地と思われる。

昭和 60 年前後に学区内の各地に点在し、埋れゆかんとする遺跡にあった石碑を集積して保存しようと学区総代会が中心となり、愛知県道路用地の余剰地を学区で使用する申請手続きを行い許可を得た。現在学区内を通っている岡刈線の開通に合わせて、愛知県が大正 6 年に建立した小豆坂古戦場と刻字された石柱を当所へ移し、その後相次いで檜立松、血洗いの池等の石碑を当所へ移し現状を形成した。会報誌（20 年 2 月発行）より

※岡崎市文化財指定 平成 11 年 10 月 7 日



ありし日の鎗立松と現存する「鎗立松」の碑



ありし日の「鎧掛松」

一の二 槍立松

織田の勇士が槍を松に立てて休息したと伝えられる。世に知るところの小豆坂の七本槍とは是なり（津田孫三郎信光・造酒丞信房・下方弥三郎匡範・岡田助左衛門直教・佐々隼人佐勝通・同孫介勝豊・中野又兵衛忠則）



四代目の松

一の三 血洗池跡

古戦場碑の西側道路を隔てた近辺にあった極めて小さき池と記されている。（道路～歩道～人家周辺）現在はその痕跡は全くない。

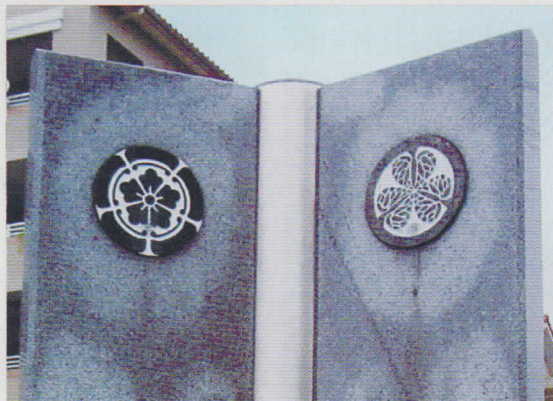


ありし日の「血洗の池」

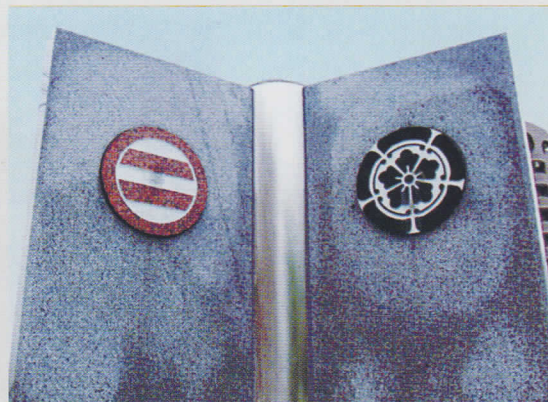


二 家紋モニュメント (不吹町北交差点西側)

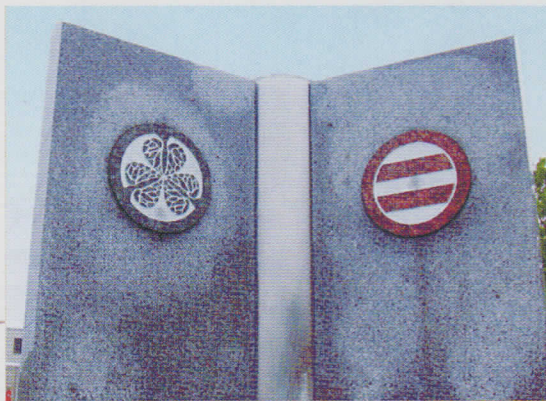
家紋の組み合わせに注目したい。



織田 V S 松平：織田軍による三河への進攻



今川 V S 織田：主力軍の戦い



松平 V S 今川：今川への援軍要請により松平と今川連合軍

三 甲谷

日清紡テキスタイル美合事業所構内及び
北側道路一帯を稱する。
大木の根元に石碑がある。



小豆坂古戦場
偲ぶれ盤(ば)
武士どもの
勝どきの声

四 生田城跡



三河物語によると、今川勢は「庄（生）田に本陣を取バ、先手ハ大平河を前にアテ、岡・大平に陣を取った」とある。生田彦四郎重勝が徳川家康公の姫御前が豊前の国中津藩に御輿入れになった際に附添武士として栄任された時の庄屋本間幾右エ門重勝に其の後始末を一任され廃城となった。

・小豆坂合戦の主戦場との説もある。



古城跡ハ
北風荒
ばかり奈里

五 鎧掛松 (通称：扇松)



今川の兵士が鎧を掛けて休息した松で宮跡の碑の周辺にあったが
(白山神社:現在は美合の日吉神社に移される。昭和30年代前半に
枯れ切り倒された。)



六 小豆坂合戦由来の碑文と道祖神

小豆坂合戦の最大の激戦地なり。駿府勢の岡部五郎兵衛元信が「味方難儀ニ及候処半途より取り返し馬を入れ敵突き崩し勝利を得」と敵さえも賞讃する働きをした場所はこの近辺だろうか。



八 馬洗池跡

現在池は無いが、周囲の地形からみるとこの場所に池があったことは一目瞭然である。
昭和55年8月、池が埋め立てられた際に建立された。

